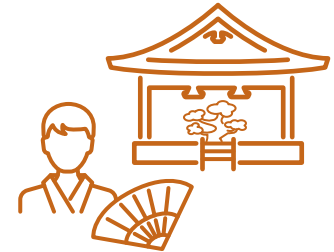




狂言に学ぶ、相続の在り方とは！

MUFG相続研究所 所長 こたに こういち
小谷 亨一

日本を代表する狂言師の方と対談する機会をいただき、その時に狂言についてわかりやすくご教示いただいたのですが、狂言は人間の持つ本質というか、エゴというか、本来の正直な姿を表現しているながら、それを滑稽として笑い飛ばせる内容になっているとの話を伺い感銘を受けました。そして、実際に狂言を観劇した時、観終わった後に爽快感が伴っていて後味が非常にいいことにも驚きました。



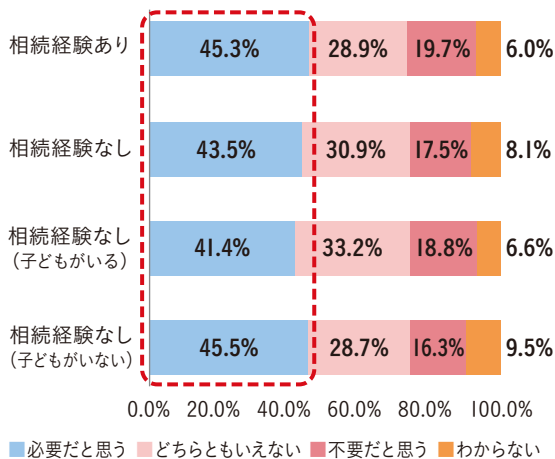
なぜかと、自分なりに考えたところ、きっと生臭さを人間の持つ優しさや明るさで包むからではないかと。

その後、すっかり狂言に嵌ってしまった自分がいたわけなのですが、これほどまでに嵌るには理由があります。私は、相続に関連したことに四六時中携わっていますが、相続は人間の本来の本質そのものだと思います。

例えば、財産分けに関しては、さまざまな思惑が絡んでしまいエゴを通そうとする人や家族円満のために我慢をする人がいたり、また過去のことが原因で感情的な対立になったりとさまざまです。その要因の一つとして、被相続人が「うちの家族は仲がいいから心配ない」とか「財産が少ないから問題ない」など、自分の思いだけで相続に向き合ってしまうからではないかと考えています。しかしながら、ある意味このような考え方は、ごく自然なことなのです。ほとんどの方は、「相続＝自分の死」と考えています。自分の死に向き合うことは並大抵のことではありません。ここに、MUFG相続研究所で行ったアンケート調査がありますので、紹介します。

遺言の必要性に対する意識

n=5,159



遺言が必要と感じる理由

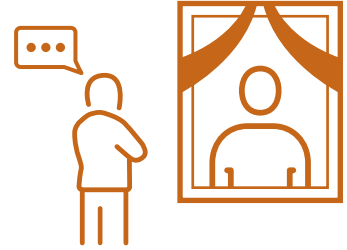
※遺言が必要だと思う人ベース n=2,274

	極力なくしておきたい	争いや揉め事の原因になりそうなのは	心配なため	夫婦とも年をとった場合に手続きできなくなるのが	円満に相続手続きが完了した話を聞いたから	遺言があったことで、	親のとき苦労した(争い・相続手続き・相続税)	話合おうが大変なため	子どもがおらず、配偶者の兄弟や甥姪と	世話になる人に渡したい	将来残った資産を	独身なので、	親も遺言を遺していた
相続経験あり	53.4%	36.3%	27.0%	15.9%	12.7%	10.0%	9.6%						
相続経験なし	50.0%	33.5%	20.5%	4.5%	19.9%	15.7%	2.8%						
相続経験なし (子どもがいる)	59.2%	43.7%	23.2%	5.5%		1.0%	3.9%						
相続経験なし (子どもがいない)	41.9%	24.6%	18.0%	3.5%	37.5%	28.6%	1.9%						

出所：MUFG相続研究所「日本人の相続に対する意識調査」(2021年3月)

次ページへつづく▶

40%以上の方が、いろいろな理由から遺言は必要だと考えています。しかし、実際遺言の準備をされている方は割いるかどうかとされています。このギャップの原因は何なのか、私は、その大きな原因は自分の死に向かい合いたくない心だと思います。相続に対する準備とは、自分にとっては死に向き合うことではありませんが、一方、家族を思ったときにはそれは別の意味を持っていると考えています。



狂言に「川上」という演目があります。この話は、大和(やまと)の国吉野の里に住む盲目の夫が、その山奥の川上という所に何事もかなえてくれるという地蔵菩薩があると聞いて出かけます。さて地蔵に着き参籠(さんろう)すると、夢のお告げを受けて目が明く。帰途についた夫は、迎えにきた妻と途中で出会い喜びあうが、地蔵菩薩が開眼の条件として悪縁ある妻と離別せよといったので承諾したと話す。仲の悪い夫婦を仲良くするのこそ神仏と怒った妻は、地蔵菩薩を罵倒し、どうしても別れないと言い張る。夫もやむなく添い続ける決心をすると、たちまち盲目に戻ってしまう。夫婦は悲しむが、「宿執(前世からの因縁)に目の潰れるとは、いま身の上に知られたり」と手を取り合って帰って行く。この夫婦の姿を通じ真の幸福とは何かを問いかける内容となっています。



この狂言は、自分の希望(欲望)と夫婦の絆を比べ、妻のことを慮り、絆を選んだものですが、相続に関してもまさに同じことが言えると思います。遺された相続人が、家族の絆を考えずに自分の気持ちだけを押し通すと、家族が瓦解してしまいます。

遺す側と遺される側、実は伴に一番大切なものはわかっています。しかし、それを阻害する要因は、「子どもたちは、わかっているはず」「親はそう思っていたはず」というそれぞれの立場からの「〇〇なはず」という曖昧な思いです。その要因を廃除し家族という絆を大切にするために、相続では被相続人は必ず文章(相続時には自分がいないため)で家族に大切にすべきことを伝え、遺された家族はその言葉を感じることで絆を忘れずに報いる。それが笑顔の承継(相続)となるのではないのでしょうか。



承継(相続)でも、狂言のように生臭さを優しさと明るさで包み、家族を思いそして自分のこだわりの滑稽さを笑い飛ばす気持ちを持って考えることが大切と狂言を観るたびに思います。

「やっとな、やっとな(どっころしよの意味)」明るく承継を考えよう。